

島木赤彦著

平福百穂畫伯裝幀
アララギ叢書第十八編

歌集
太^{たい}虚^{きよ}集^{しふ}

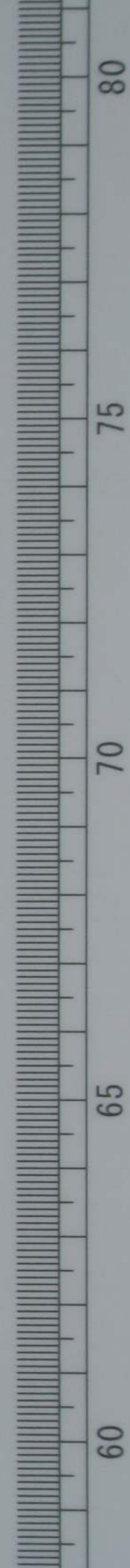
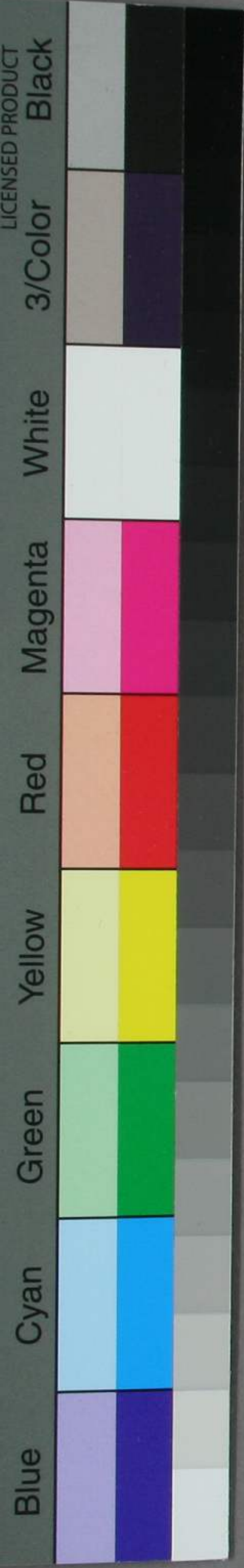
東京 古今書院發行

歌集
太^{たい}
虚^{きよ}
集^{しふ}

島木赤彦著

院書今古

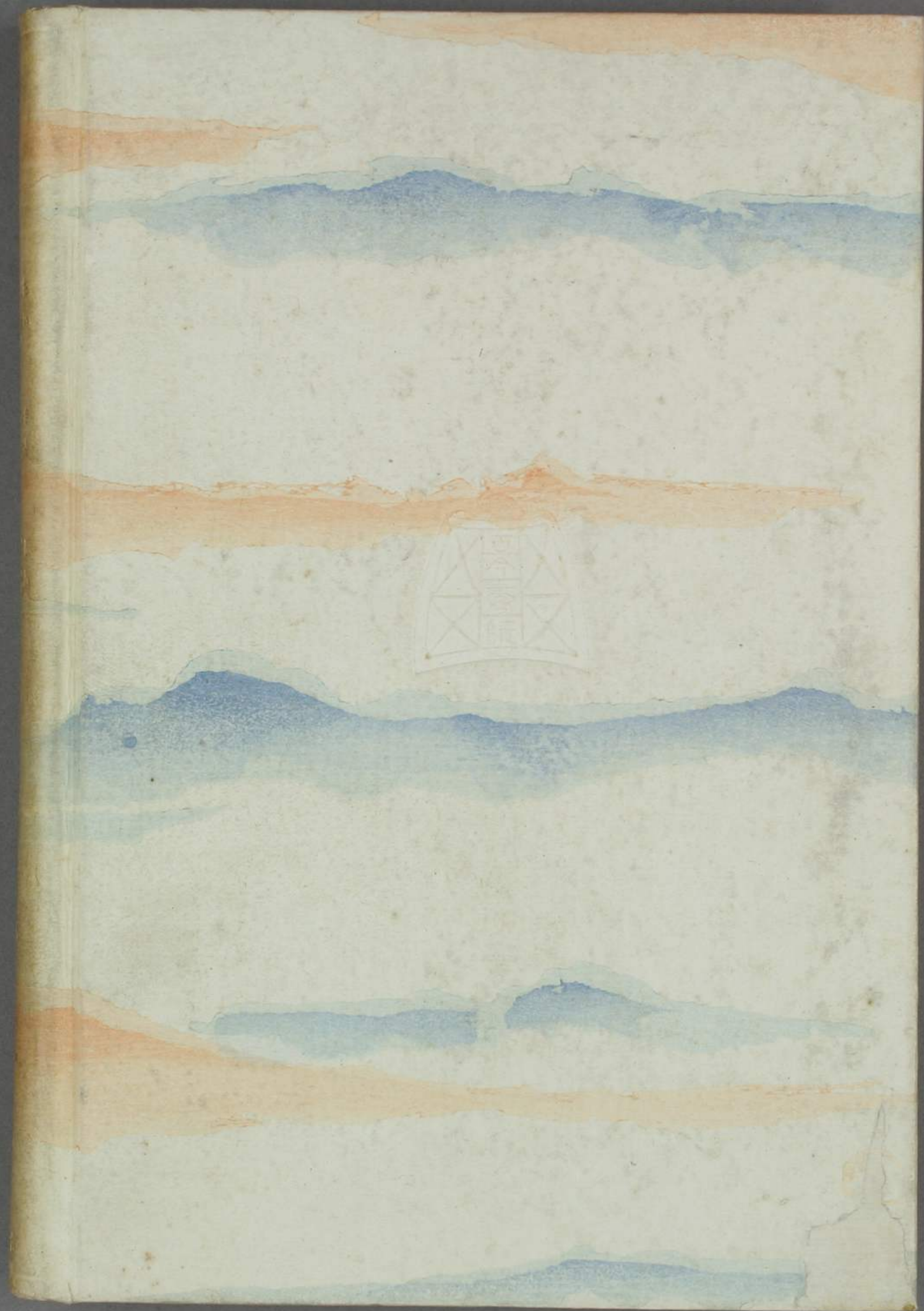




歌
集
。 大 たい
。 虚 きょ
集 しふ

島木赤彦著

院書今古





島木赤彦著

アララギ叢書第十八篇

歌集
太^{たい}虚^{きよ}
集^{しふ}

東京古今書院發行

太虚集目次

大正九年

長崎……………三

金華山……………一

瀧の湯……………一

巖温泉……………三

冬田の道……………五

大正十年

生くるもの……………三一
 なりなり……………三三
 梅雨ごろ……………三六
 富士見……………四〇
 松林……………四二
 このごろ……………四四
 桑畑……………四六
 木曾御獄……………四九
 太平洋會議……………五四
 森本富士雄君の洋行を送る……………五九

土用……………六〇
 歌集藤浪に題す……………六三
 皇太子殿下御渡航……………六五
 齋藤茂吉西歐に向ふ……………六九
 初冬……………七二
 諏訪湖……………七六
 しはす……………七九
 試験……………八一
 吳博士在職二十五年を祝す……………八三

大正十一年

小寒……………八七
 庭上……………九〇
 初春……………九一
 生々諸相……………九三
 折々の歌……………一〇一
 茂吉を思ふ……………一〇五
 くさぐさの歌……………一〇八
 有明温泉……………一一三
 左千夫十回忌……………一一七
 柿蔭山房……………一二八

大正十二年
 姨捨驛……………一二七
 京都黒谷……………一三〇
 大和古國……………一三四
 初冬……………一四〇
 冬……………一四五
 こもりみ……………一四七
 高木村落……………一五一
 柿蔭山房……………一五二
 古田なる生家を訪ふ……………一五五

春……………一五六

瀧の川……………一六一

別所温泉……………一六三

小淵澤驛……………一六五

巖温泉……………一六六

左千夫忌……………一七一

夏もなか……………一七二

早天……………一七四

皇太子殿下富士御登山……………一七五

代々木原……………一七七

大正十三年

高原……………一七八

偶作……………一七九

關東震災……………一八〇

滿洲……………一九一

土田耕平飯山にあり……………二〇六

折々の歌……………二〇八

初冬……………二〇九

一月……………二一五

諏訪湖畔……………二一六

なりなり 二一七
 暮 春 二一九
 山の湯 二二〇
 湖 畔 二二三
 田中法善寺 二二四
 ある時 二二五
 燕嶽の上 二二六

目 次 な は り

大 正 九 年

長崎

大正九年七月齋藤茂吉君の病を訪ひて長崎
に至ることあり。大村灣にて

國土くにもはてしとぞ思ふ入海の向うに低き段段だんだん
島しま

わが友の命をぞ思ふ海山のはたてにありて幾
とせ經つる

汽車のなかに眼にしむ汗をふきにけり必ず友
を死なしめざらむ

汽車のなかに透る光のひまもなし心ひたすら
に我は坐にけり

山かひに入江は照れりわが友の命を見むと我
は急ぐに

長崎二

夏もなか病み衰ふる友のまへに心いたましく
坐りつるかも

長崎の古りにし家にうらがなし疊ほてりて日
はいや閑けぬ

坐りゐて耳にきこゆる蟬のこゑ命もつもの
などか短き

夏の日は暮れても暑し肌ぬぎつつもの言ふ友
の衰へにける

長崎三

長崎の低山竝みにはさまれる海遠白し明けそ
めにけり

古りにける港の道の整明くれば暑く日は照り
にけり

唐寺たうじの古りにし庭に蟬せみなけり心ひそけく我は
來にけり

坂本天山の墓に詣づ

青雲の遠きを望み至りける人の命のいやはて
どころ

思ひつる墓かぶに詣までぬ故郷ふるさとの信濃しんりゆうの人に言告ことげ
やらむ

友を促して温泉嶽山上の湯に赴く

山かひの道のほとりに湯げたてりここに來に
ける命をぞ思ふ

山の上の光は明し湯あみゐる友のからだを思
ひ見る我は

高山の繁木がなかに蝸の鳴く夕ぐれとなり
けるかも

わが友をのこして下る山道の真下になし朝
あけの海

金華山

九月石原純君と金華山に遊び歸途
風浪に逢ふことあり

わが船にうねり近づく大き波眼のまへの島は
隠りぬ

ゆゆしくもち揺る船か海うみの原四方のそきへの傾くまでに

揺りあぐる波を仰ぎ見足もとにうち臥す人を
しまし思はず

わが心ゆゆしきものか八重波のしき波のうへ
にいや静まりぬ

往路船相川の岬をめぐる

瀬せのいろ深く透れり群むらだてる岩並みの底の見
ゆるばかりに

わが心をたもちつつ居りよる波のうねりの底
に蒼める岩むら

この海の水底にある岩のむれおほに見えつつ
思ひ知られず

もの言はぬ己が静けさに親しめり波まなくし
て目のくるる船に

横になれる友も眠れるにあらざらむ波うちあ
たるふなべり舷の音

山鳥のわたし

島にわたる渡しを見れば霧流るる巖いはほのうへに
家一つあり

家一つ高きに立てりそばだてる岩根とどろか
し鳴る波のおと

船島に近づく

海峡に二たわかれ見ゆる大海より向ひつつ來
るいく重の白波

夕波の音にまぎれざる沖つ風聞きつつあれば
とよもし來きたる

わが船の波のあたまより下くだるはやし底ひ知ら
れぬ思ひしてをり

雨雲や寄せつつ來くらしいちじるく暗き沖べに
とぶ波がしら

しばしばも現れて見ゆ沖波の高きうねりに浮
きあがる船の

つぎつぎに邊にむかふ波の高く低く影をなし
 つつ夕づきにけり

霧のなかに仰ぎ見にけりこの島の巖いは高くして
 のぼる道あり

金華山にある三日

ささやかなる島に來にけり波の音四方をめぐ
 りてさわぐ日のくれ

うしほ風いたくはげしき岬山さきやまの芒のなかに我
 は傾く

沖べより吹きとほし來るうしほ風岩にあたり
 て霧となる見ゆ

木木はみなしとどに霑れぬ島山に吹きあたる
風の霧となりつつ

荒磯波寄せて引くとに寂しけれころがりて鳴
る石ころの音

荒磯岩とよもす波の音にさへ馴れたる鹿や草
を食みをり

瀧の湯

湯女は皆越後生れなりとか。庭つ
づき秋草の花の盛りなるに

蓼科の山のいで湯の庭に出でて踊りををどる
少女子のとも

草山は夜更けて月となりにけり疲れも知らに
踊る子どもら

故郷の越路こしぢおもへばいと遠し月明らけし草山
の上に

長き日の夕ゆふとなりぬ湯の山に並び傾くいく山
の裾

巖いはほ 温泉

十一月末森田恆友畫伯と共に蓼科
山の湯に一泊す

草枯丘いくつも越えて來つれども蓼科山はな
ほ丘の上にある

いくつもの丘と思ひてのぼりしは目の下にし
てひろき枯原

雪ふりて来る人のなき山の湯に足をのぼして
暖まりをり

山風のさわぐ浅夜に酒に酔ひていづる疲れを
安しといはむ

冬田の道

さしのぼる日のかげうすしあしたより風疾はやく
吹く冬田の面おもて

あしたより曇りかさなりて暗くなれる冬田の
面に音おとする木枯こがらし

時のあひだ冬木の鳴りの静まりにおほに音あり
風吹く大空

大きなる風音となれり目のまへに曇り垂れた
る冬田のおもて

風に向ふわが耳鳴りのたえまなし心けどほく
ただ歩みをり

吹く風にみづうみいたく荒れぬらし田圃たんぼの道
に音の聞ゆる

木枯にいたくあらぶるみづうみの波がしら見
ゆ田圃の向うに

冬田もてかくめる湖うみの浅くあれやあした風吹
きてはやく濁れる

山の上はすでに雪あり雲行きすみやかにして日の洩るる多し

大正十年

天つ日はたふとくもあるか大空にいや高くし
てあまね汎くしあり

友のことおほほしく心にかかりて年の初めつ
頃より歌作らん心も出でずうち過ぎけるに五
月のある日ふと心に動くものありて

生くるもの

天つ日は面おもてをあぐれば面のうへにつねに現うし
き若光わかひかりかも

同じ時二階に上り来る小さき足音
あり

稚子をさなごの心はつねに満ちてあり聲をうちあげて
笑ふ顔はや

をりをり

五月十九日

桐の花のおつる静かさよ足らひたる眠りより
さめてしまし居にけり

桐の花も散りがたとなれる裏畑に朝あした一ととき
下り立ちにけり

五月二十日。雨晴る

日のあたる埴山はなやまを見れば柔かくひろがりにけり
櫟の若葉

六月七日

朝づく日とほるを見れば茂山しげやまのはさまに靄は
のこりたるらし

茂山の木の間まに靄あやのこるらし清すがしと思ふ光
透るも

梅雨ごろ一

五月雨のいく日も降りて田の中の湯あみどころに水つかむとす

みどり子の肥え太りたる腕短しただに歡びて湯をたたき居り

何ものを見るとにあらず幼子の足^たり頬^ほ笑まひてただに見て居り

湯をあがりてしまらくいこふわが肌の冷えいちじるく梅^つ雨^りふけにけり

梅雨ごろ二

時鳥夜啼きせざるは五月雨のふりつぐ山の寒
きにやあらむ

夜よるふけて寒しと思ふに五月雨の雨あまだりの音高
まりにけり

降りしきる雨の夜はやく子どもらの寝しづま
れるはあはれなるかな

五月雨の小止みとなりしひまもなし桑原とほ
く音おとして降り來く

海をこえて行くらむ友に寂しくぞ思ひ至りて
今宵このよるにけり

窓べまで茂れる桑にふる雨の音を立てつつ今
日も降りりをり

旅にありて若布わかふをひさぐ少女をとこめ一人降りしきる
 雨に霑ぬれて來にけり

富士見

昨夜よるいねし野の宿の戸を明けて見れば蕎麥の
 花咲けりませ垣かきの外そとに

戸をあけて即ち向ふ落葉松かからまつのしげりを透す朝
 日の光

この朝の風に吹かるる霧うすし霑ぬれつつ動く
 桔梗ききょうの蒼

からまつの木立をしげみ夏蕎麥の花さく畑に
 朝日あたらす

松
林

赤松の森のうへなる雲の峰にひびきて鳴けり
蟬のもろ聲

赤松の幹より脂たにの沁みいづる暑き眞晝となり
にけるかも

この森の深きに居りて見えにけりたまさかに
する遠稻光

赤松の林のなかの蘚深し洩れつとほる光の
幽けさ

このごろ

寂しめる下心さへおのづから虚むなしくなりて明あし暮らしつ

童子わらはこが手にもて來つる澁き茶を疊におきて心
寂しむ

わが部屋の疊をかへて心すがし昨日も今日も
一人居にけり

原の茶屋村落

舊道きうだうの草穂に出でて歩みにくし富士見峠の家
に來にけり

桑
畑

昨まの夜の一夜空はれてたまりたる桑の葉の露
滴りにけり

桑の葉のもろ葉の露のしたたりのけはひ静け
きこのあしたかも

桑の葉の茂りに向ふわれの目に光をひきて日
は射さしにけり

このあしたしとどにおける桑の露の乾くを待
てり桑摘むわが妻

桑畑の桑つむ人ら晴れの日を喜び言ひてうち
疲れをり

畑の中に汗をば搾りつくせりと戯れ言ふもか
なしき子どもら

夕ぐれのすすしさ早し開けはなつ家を吹きと
ほす桑畑の風

桑摘みて桑かぶれせし子どもらの痒がりにつ
つ眠れるあはれ

木曾御嶽

梅つばきの木の木立出づればとみに明あかし山をこぞり
てただに岩むら

夕ぐるる國のもなかにいやはての光のこれり
わが立つ岩山

天の原日は傾きぬ眼のまへにただ平らなる
 松の原 偃^{はひ}

はひ松のかけ深みつつなほ照れる光寂しも入
 日のなごり

星の夜の明りとなりぬ目のまへにいくばくも
 なきはひ松の原

未明に田の原を發す

踏みおぼる岩のむれの目に馴れてあやしく
 明かき星月夜の空

星月夜照りひろがれるなかにして山の頂に近
 づきぬらし

山の上にわが子と居りて雲の海の遠^{とほ}べゆのぼ
る目を拜みたり

山なかになしくもあるか疲れたる我の背を
押す子どもら二人

のぼり来て心寂しも雲のなかにやや現れてか
さなる岩むら

雲の海のもなかにありて足につく土の埃をは
らひけるかも

わが心物思ひがたし山の上にかさなる岩のた
だ明^{あか}くして

子どもらは寂しくあれや曉の岩かけにゐて物
を言ひたり

太平洋會議

久方のあめりかびとがいくさ船造りつつ白^{まう}す
 言のよろしさ

國際聯盟を提唱して今關せず

たはやすく口にまうして昨日恥ぢ今日も白^{まう}さ
 く言のよろしさ

公の道を告^のらさば青雲の明^あかく空しき心ある
 べし

青雲は己れ空しく澄みとほり明かにして底ひ
 さへなし

天照^{あまて}る日^ひの下^{した}にして西^{にし}の民東^{あづま}の民と思^{おも}ひ分^{わか}て
り

西^{にし}の民東^{あづま}の民と分^{わか}ちたる心^{こころ}を去^さりて大^{おほ}き道^{みち}を
告^つれ

綿津見^{わたづみ}の神^{かみ}の御魂^{みたま}の黙^{もく}にあるを黙^{もく}にしありと
思^{おも}ふことなかれ

人^{ひと}の道^{みち}をまこと畏^{おそ}み思^{おも}へらばただに黙^{もく}して行^い
くべかるらし

今^{いま}の時に言^いひて憚^{おそ}るところなし天^{あま}が下^{くだ}なる大^{おほ}
き亞米利加^{あみりか}

綿津見^{わたづみ}の鰻^{うなぎ}ら白^{しろ}さく己^{おの}腹^{はら}を己^{おの}れ患^{あは}へず人^{ひと}の腹^{はら}
をうれふ

日のめぐり月のめぐりのいや果ての光思はば
 慎みてまうせ

亞米利加に敢へて物申す己が船をいや斷に斷
 ち棄つる心ありや

人をして言はしむるをぞ引綱のもそる言とい
 ふ英吉利はいかに

森本富士雄君の洋行を送る

一人とぞ思ふ心を綿津見の遠き波まに守りい
 まさむ

行方さへ思ひ知られず和田の原波のまにまに
 身を守りいませ

天つ空遠とほのそぐへにあらむ船に我の心は行く
べきものか

土 用

日出づれば即ち暑しあかつきの雲の散りばふ
赤松林

畑の上に掘り出されたる馬鈴薯ばれいしょの土ながらな
る色の美うましさ

畑の上に堆うづたかくして積まれたる馬鈴薯ばれいしょの肌いま
だ乾かず

かがまりて薯を掘りゐるわが顔より滴る汗は
落ちにけるかも

土の中に指を動かして大きな薯を探るはお
もしろきかも

夕ぐれのすすしさ早し山畑をめぐる林の蝸の
こゑ

野の川の水のつめたさよ薯掘りて爪にはさま
れる土洗ひをり

歌集藤浪に題す

杉浦翠子夫人第二歌集に歌を徴せ
られて

この道や遠く寂しく照れれどもい行き至れる
人かつてなし

心淨き男女をとこをみなとなりがたし我も悔やしくこの道
を歩む

この道やつひに音なし久しかる己が歩みをと
どめて聽けば

現うつし身の歩みひそかになりゆくとき心に沁み
ていよよ歩まむ

皇太子殿下御渡航

天つ日は空をわたりて大海の果てにありとも
明日をし待たむ

青雲あをぐもの向伏むかひすきはみ天つ日はい照りにい照り
めぐりかへらせ

薪山をひと日やすみて大御幸を神に祈れりこの村の人ら

皇太子殿下海外より御還啓の日

四方の民今日歡びの眉をあげて日の若皇子を迎へたてまつる

海の上にいませる皇子をいく久に待ちか戀ひけむ日本民らは

み民らの心の下に愁ひたるうれひは晴れぬあはれ足日や

愁ひすと我は言ふとも海のうへにいませる皇子を思はざらめや

御還啓の日子は富士見野にあり

晴れわたる天の足^た日^ひや秋の野の花さへ色に照
り満ちにつつ

限りなく晴れたる空や秋草の花野にとほき^た蓼^れ
科^{しな}の山

齋藤茂吉西歐に向ふ

ひとつ日のもとにありとし思ひつついく年久
にわれはたのまむ

いたづきのなほのこる君を海山のはたてにお
きて思はむものか

病ひにも堪へつつ君は行くらめど堪へられめ
 やもそを思ふものは

病ひなき地しあらねば天のままに生きてあら
 むと言のかなしさ

十一月二十八日横濱解纜

益良夫は言にいはねども幼な子を船の上より
 顧みにけり

人の中よりさしかざしたる幼な子を見つつあ
 るらむ船遠そきぬ

海も空もうるほひ澄める日の光船は遠きに向
 ひつつあらむ

初冬

山のべに家居しをれば時雨のあめたはやすく
来て音立つるなり

光さへ身に沁むころとなりにけり時雨にぬれ
しわが庭の土

わが庭に散りしもろもろの木の葉さへさやか
に見えつあはれ月夜に

久方の月明らけし時雨の雲はつかに山にのこ
りたるらし

山もとに時雨の雲は動けども月の光し押し照
りにけり

桑畑の桑の落葉にふる時雨さわがしくしてう
ち止みにけり

この朝け戸をあけて見れば裏山の裾まで白く
雪ふりにけり

きその雪かつがつとけし裏山の櫟葉さむく夕
映えにけり

櫟葉にふりける雪は照りかけり寒き光に霏す
らしも

今更のことならねど

物乏しきこのごろ少し寂しくなり萬葉集をよ
みぬたりけり

諏訪湖

湖べ田の稻は刈られてうちよする波の秀ほだち
の目に立つところ

師走風吹きふくままに湖の波の濁りをあげて
夕ぐにけり

一と時の日ざし明るし濁りたる波の起き伏し
に静かにゐる鴨

星月夜さやかに照れり風なきて波なほ騒ぐ湖みづうみ
の音

上諏訪の温泉に佐々黙々君を訪ふ

あけて見る小窓のそとは冬田なり荒るる湖よ
り家鴨歩み來

茅屋のうち

時雨ふる晝は圍爐裏に火を焚きぬこの寂しさを心親しむ

しはす

福壽草の鉢をおきかふる幼子や縁がはのうへに移る日を追ひて

福壽草のかたき苔にほの見ゆる紫寒し日あたりにつつ

敷きおける靱がらを見ればはつはつに頭かしら出せ
り福壽草の荅

福壽草の荅いとほしむ幼な子や夜は圍爐裏の
火にあててをり

幼な子が道とほく行きて買ひしよりいく日ひ
らかぬ福壽草の荅

福壽草のかたき荅にこの夕息いきふきかけてゐる
子どもはや

試 験

愚かとしただに言はめや自らの力をつくし飯いひ
減へるこの子を

なるがままになるに随ふことを知れるこれの
子どもを下思ふなり

自らをあはれめる子やあかときの雞聞きて眠
りたりとふ

曉あかつきがた眠りふけれるこれの子の頭あたまをま目守もるあ
はれに思ひて

吳秀三博士はわが友茂吉君の師なり。
大學教授在職二十五年を祝す。

尊くもいます君かもひとすぢの道を歩みてつ
ひに倦まなくに

年老いて歩みやすめざる一筋の道のおくがを
おもひ知られず

いのち長き人はあまたあり一筋の道を行きつ
くしなほゆくわが君

わが友の茂吉の心を恐れしむる
大きき人ありと
知りて年あり

わがどちの茂吉を叱りたまふゆゑ親のごとく
にわれら思ひをり

大正十一年

冬の日
の日の暮るるに
早し
學校より一人びとりに
歸り來る子ども

山居冬に入つて閑更に閑なり

小寒

この日ごろ堅く凍れる庭の土にさす光さへ蹙しじ
まりにけり

小禽来てひそけきものか土の上に茨の赤實を
食みこぼしたり

冬ふかみ霜焼けしたる杉の葉に一と時明かき
夕日のひかり

雪の上に落ちちらばれる杉の葉の凍りつきた
るを拾ひわが居り

縁さきに干したる柿に日短し郵便配り食べて
行きにけり

静けさの果てなきごとしにはとり雞をはぐら罎に入れて戸を
しめしのち

庭 上

腹のものを反し哺む親鳩のふるまひかなし生けるものゆゑ

家鳩を飼ひて愛しも親と子の嘴を相啣み哺む朝夕

初 春

朝の日の窓にうすしと思ひしは春雨はれて露の立つなり

暖くすがしき朝や靄だてる枯木林に日のあたりつつ

春の雨はれてすがしきこのあした目に立つ草
のみどりさへなし

所見

紅梅の花にふりおけるあわ雪は水をふくみて
解けそめにけり

生々諸相

殷仲春、厥民析、鳥獸孳尾

親^{おや}雞^{どり}の腹の下よりつぎつぎに顔現るるひよこ
らあはれ

静まりて親の嘴くちばしをつつきゐるこれのひよこは
遊び倦みにけり

親おやどり雞は知らぬに似たり居眠りてとづる眼蓋まなぶたを
つつくひよこら

おのおのおの親の腹毛にくぐり入るひよこの
聲の心安やすげなる

腹の下にひよこを抱きて親雞のしづまり眠る
その静かさや

平和は平板にあらず。青春時に波
瀾を喜ぶ。

親雞の背せにのぼりたるひよこらは危せうげにし
て喜ぶらしき

いとけなきふるまひ愛ししが嘴にあまれる蟲
を争ふひよこら

「遊びをせむとや生まれけむ」の古謠
夙く人間の真相を道破せり。

親雞の翼のひまゆぬけ出づるこれのひよこは
戯るらしき

何ものか天變地異を免れむ

大空を鳥行きしかばひよこらの相いましむる
諸聲あはれ

生物に絶對の自由なし

鳥籠をいでしひよこら地に飛ぶと羽すりてと
ぶ見つつ愛しも

苦樂一如は愛の相也

親雀しきりに啼きて自が子ろをはぐくむ聞け
ば歎くに似たり

身心を獻するは愛の至也

さ庭べの石垣の巢に餌はこぶ小雀めの親は人
を怖れず

六尺の布猶縫ふべし

相依りて寝竝ぶものかはしけやし家鴨の雛に
親はあらくなくに

生の相一に非ず

冬山に死にゐる小鳥餌なくてかかることあり
と聞くがかなしさ

折々の歌

山々の落葉松の芽は久しけれ漸くにして緑と
なりぬ

朝々の光すがしも向山にひろがりおそき櫟の
わか葉

萌えいでていくらもあらね櫟山土肌明かく日
はあたりつつ

朝なあさな山にぞ向ふ落葉松の若芽は過ぎて
櫟の若芽

山吹の花咲きいでてなほ寒し朝なあさなに霜
おく山かけ

山吹の花を久しみ山かけの櫟の木むら萌ゆべ
くなりぬ

このごろの山の肌の白々しくぬぎ若葉に風吹
きにつつ

このごろの山の清しさや稚き子の初毛をなし
て伸びたつ櫟葉

あかねさす晝のあひだの月うすし風吹きわた
る 榎若葉山

杉生山木ぬれの霧の散りぼひに見えそむるな
りあかとき青空

風の吹く杉の木末を仰ぎをりうちゆすぶる
杉の木末を

茂吉を思ふ

去年洋行前病を養うて富士見にあ
りき

遙かにも隔てつるかも谿川の水を浴みつつ昨
日ありにし

鴉啼く谷まの森に入りゆきて水を浴みけむ自
が心あはれ

蠅捕器につぎつぎとまるさ蠅らを見つつあり
しは寂しかりけむ

草も木も緑ふけたる野にありて思ひしことは
限りなからむ

草の色すでに衰ふる野の家に薬を煮つつ一人
ありけむ

陸奥より出で來し人を驚くなかれ高橋お傳に
似るといひつる

あげつらひ誼ひすぎしわが友を遠ちにやりて
下思ひをり

くさくさの歌

政黨者にありて珍品問題の如きは
末端のみ

法師らが食うべし鯛の骨は刺し腹のそこ痛み
人に言はずあはれ

總裁の辯疏多く語るに落つ

わが家の背戸せどにひそかに居りけらしあやまち
しごとかたす鴉啼きたり

政友會近時

いづくにかこの日は暮れむ大空の風に逆らひ
て飛ぶ鴉あはれ

國民黨

猛き虎たけきを恃^たみ森ふかく遂にこもりて老
いゆくらむか

一二新進なきにあらす

後の世にのこさむと思ふ虎の子は幾^{あまた}多は生ま
すあはれ虎の子

議會彈効多し

鼻くそをまるめて春の日は永し爪もてはじく
その鼻くそを

自らよしとするもの

簞蟲は己おのを守ると枝に垂り垂りも垂りけり地
につくまでに

有明温泉

たえまなく鳥なきかはす松原に足をとどめて
心静けき

いづべにか木立は盡きむつぎつぎに吹き寄す
る風の音ぞきこゆる

楮^{しもとほら}原ひろがりあへる若き葉にふりそむる雨は
音立つるなり

わが歩み近づきぬらし松原の木のまにひびく
山川の音

谷川をへだてて物を言ひかはす人聲あやし激^{たぎ}
つ瀬の音

湯の宿

白雲の遠^{とほ}べの人を思ふまも耳にひびけり谷川
の音

なつかしと思ふ山さへ空遠しわれは忘れずこ
こにゐにつつ

湯の宿やどにをりをり降るは五月雨か木このくれ深く音を立てつつ

歸途

山道に昨夜ゆうべの雨の流したる松の落葉はかたよりにけり

小松原雨の名残の露ながら袂にさはる青き松かさ

左千夫十回忌

み墓べの榛の木もみぢの葉にこもらへる青實の揺れも心ひそけき

柿蔭山房

おのづから汗や沁みけむ坐りつつ時を經にける
 疊の上に

いく久につづく早りに蟬さへも生れざるらむ
 聲の乏しさ

暑き日のま晝まにしてもの書かむ心のそこの
 しまし澄みつる

暑き日を坐りつづけつつ山の草の煎じ薬をわ
 が飲まむとす

八月某日高田浪吉來る

山下のわが家の井ゐどは冷たけれ遠こ來し人に飲ま
しめにけり

藤澤古實赤石連山より歸る

心さへ人の清すかしさ天の原遠つ高嶺たかねのうへより
來りて

日ごと物書きつづくるほどに

坐りつつただにありとし思ふだに久しくなり
ぬ夏ゆくらむか

八月二十四日野分

はやて風枝ながら揺る柿の實のつぶらつぶら
にいまだ青けれ

またの日

きその夜の風に傾ける玉蜀黍の青あを高たか稈がらを伐り
てたばねつ

野分すぎとみにすすしくなれりとぞ思ふ夜よ
半なに起きるたりける

夜坐

つぎつぎに過ぎにし人を思ふさへはるけくな
りぬ我のよはひは

八月二十五日

冬菜まくとかき平ならしたる土明かしもの幽け
きは晝ふけしなり

庭前の畑

鉄もてはさむに青き唐辛子蟲の鳴く音のしま
らく止みし

畠なかに手もてわが扱こく紫蘇の實のほひ清すが
しきころとなりにし

九月十九日子規忌

むらぎもの心澄みゆけばこの眞晝鳴く蟲の音
も遠きに似たり

雨後の畑

ただ一つのこるダリヤの花見ればくづるるに
近し紅くれなるの色

九月二十二日 娘捨驛にて

天あめとほく下おりぬしづめる雲のむれにまじはる
山や雪降れるらし
いちじるく雪降れる山や天の原下おりぬ向むか伏ふす
むら雲のなかに

雲動くむら山の上に飯綱のひと山白く雪降り見ゆ

雪をかむる山の相すがたや雲のむれの動きあひつつ立ちもはなれず

家の庭

朝ごとに庭の胡桃くるみ樹みの下土におのづから落ちてある果みを拾ふ

土に落つる胡桃の皮はもろくしてあらはにまろぶ果みさへ目に見つ

この朝の時の久しき霧のなかに見えつつのぼる日影を寂しむ

京都黒谷

十月末つ方黒谷瑞泉院に淹留する
こと十日

松風に時雨のあめのまじるらし騒がしくして
小夜ふけにけり

この谷の松の落葉に霜白し木魚音するあかと
きにして

一人居に馴れしに似たり朝な朝な飯をたぶる
と山を下るも

冬の日は低くしあれや日もすがら黒谷山の木
がくりにして

吉田山朝こえゆきて古のふみ書きうつす夕日
の 入るまで

三日月の光幽かきけき木がくりの庵にかへりて心
やすらふ

三日月の光木この間に入りやすしはかなき思ひ
湧くとあらぬに

山に来ていく日を我は過しけむ入つ手の花芽
たちそめにけり

中村憲吉黒谷を訪ひ來る

わが友と朝あしたの床に目ざめゐて物を言ふこそ親
しかりけれ

大和古國

唐招提寺

霜晴れの光りに照らふ紅葉さへ心尊しあはれ
古寺

法隆寺夢殿

扉とびらひらけばすなはち光流るなり眼まなこのまへの御
佛の像

遠どほに思ひ來りて御佛の長裳みたびすのすそに額ひたひす擦
る我は

明日香

明日香路をか行きかく行き心親しいにしへびと古人をあひ
見る如し

あら玉の年の緒ながく思ひつる明日香の里に
旅寝すわれは

天なるや月日も古りぬ飛ぶ鳥の明日香の岡に
立ちて思ふも

山川を俯し見仰ぎ見いにしへの人にぞ戀ふる
わがこひごころ

わたる日の光寂しもおしなべて紅葉衰ふる古
國原に

中村憲吉と同行なり

わがために二日の業なりを休み來し友と夜を寢ひる
明日香の家に

明日香川瀬の音とひびかふ山峽やまがひに二人言止ことやみあ
るが寂しさ

中村憲吉堀内卓等と親しかりし高
崎義行氏の墓に詣づ

坂田の丘のうへなる奥津城おくつぎに涙をおとすその
母とともに

今日の日の今の時まで思はざりし人のみ墓はかに
咽なみせつつ泣かゆ

初冬

わが庭に松葉牡丹の赤莖のうつろふころは時
雨降るなり

このごろの光やうすきわが庭に時雨のあめは
晴れにたれども

いや日けに青むみ空やこのごろは時雨のあめ
の降ることもなし

十一月二十五日

湖つ風あたる障子のすきま貼^はり籠りてあらむ
冬は來にけり

長子政彦の逝きしは十二月十八日
なりき

冬空の澄むころとなれば思ひいづる子の面影
ははるかなるかな

旅にして逝かせたる子を忘れめや年は六とせ
となりけるかな

命にしひそめるものを常知れり心かなしも空
澄むこのごろ

霜月の眞澄の空に心とほりしまらく我はあり
にけるかな

冬とおもふ空のいろ深しこれの世に清らかに
して人は終らむ

玉ゆらの時のあひだも止どまらぬ命と思へど
思ひ知られず

諏訪湖

湖のへに朝あしたありける薄氷うすこほり風ふきいでて碎けけ
るかな

冬

冬の日の光明るむ籠のなかに寂しきものか小
鳥のまなこ

晝は遊び夜は眠れりただ一つ籠に飼はるる小
雀がらめあはれ

ひとりして籠こに遊びゐる小雀こがらめの鳴く音寂しも
冬深みつつ

冬山にあしたもの言ふ人の聲さやかに聞ゆわ
が家のうちに

子をつれて尿ゆまりにいでし縁のうへに木影さやけ
し月傾きて

こもりゐ

冬の日のひと時明かき窓のうちに残る蠅さへ
なくなりにけり

この眞晝炭にまじれる古き葉のけぶるにほひ
を寂しみにけり

り 屋根 葺かむ 萱の 束ねを 庭につみて 日かげとな
ぬ 朝々の 霜

大正十二年

高木村落

空澄みて寒きひと日やみづらみの氷の裂くる
音ひびくなり

學校にて吾が子の飯の凍るとふ今日このごろ
の寒さを思ふ

柿蔭山房

今日の日も足らふに似たりわが掘りし雪割茸
 をあつもの羹にして

庭つづき柿の島の雪深し雪割茸を掘りて得に
 けり

十方じつぱうに雪の光は遍あまねけれ雪割茸を掘りてわが
 居り

山にして雪割茸を送りやらむ人さへ遠く思ほ
 ゆるかも

照らふ日はかそけくもあるかわが庭の雪に埋う
 るるそよごの赤實あかみ

鶉^{つぐみ}來てそよごの雪を散らしけり心に觸るるも
のの静けさ

欠^{あぐ}呻^びして出でし涙を拭きにけりもの書きふけ
る心のひそけさ

この眞晝入り來る人あり門^{かど}の外^とに凍れる雪を
踏み鳴らしつつ

冬ひと日巢藁にこもるモルモツト藁を動かし
遊ぶ音すも

古田なる生家を訪ふ

孫のことを言ひつつ笑ふわが母の脛^{あきと}あらはに
なり在^ましにけり

春

高槻たかつきのこすゑにありて頬白ほくしろのさへづる春とな
りにけるかも

胡桃の木芽ぐまむとするもろ枝の張りいちじ
るくなりけるかな

桑原の色いちじるくなりけりこの降る雨に
芽ぶかむとして

春雨の雲のあひだより現あらはるる山の頂は雪眞白
なり

ひよこらを伴つれつつ歩む親雞おきなの間まなくし呼ぶ
は思ふらむかも

生けるものなべて歎けり散らばれるひよこを
 呼ばふ親雞のこゑ

土の上に白き線すぢ引きて日ぐれまで子どもの遊
 ぶ春となりけり

春はまだ土踏む足の冷たからむ草履がくしを
 子らのして居り

運び來し雪折れ松を庭に積みて昨日も今日も
 香ひすがしき

わが家の疊をかへて春淺し障子明け放ち一人
 ゐにけり

風わたる遠松原の音聞ゆ昨日も今日も冴えか
 へりつつ

山鳩の聲聞きがたし松原をとよもす風の絶え
まなくして

萌えいづる草の芽見ればこの春の土の香ひの
心地こそすれ

萌えいでてややひろがれる露の葉に風ふきし
きて日ねもす曇る

風となりて俄かに寒し芍薬の芽立紅だくろくなるにうちゆ
すれつつ

高木今衛寓居瀧の川にあり

ひそかなる庵いはりにもあるかいく本の槻もとのあひだ
より歩み來りて

若葉して降る雨多し窓さきに濡れて竝べる大
槻の幹

雨止みて木々の雫のいつまでも落つるいほり
にあるが静けさ

庵いほりかこむ高槻の葉に雨多し清すがしさ過ぎて寒き
目もあらむ

別所温泉

若葉山降りすぐる雨は明るけれ鳴きをやめざ
る春蟬のこゑ

降りすぐる雨白じろし一と山の楮しもとわか若葉はのそよ
ぐばかりに

春蟬の聲は稚わかけれ道のへの若葉に透とほる日の光
かな

湯を出でて冷えびえしけれこの山の若葉の上
にはるる朝空

別所温泉安樂寺二尊像

山かげに松の花粉こなぞこぼれけるここに古りに
し御佛の像

小淵澤驛

若葉うまやする驛うまやのまへの谿深し雪ののこれる山々
に向ふ

巖温泉

山にして遠裾原に鳴く鳥の聲のきこゆるこの
朝あしたかも

湯のうへの岡にのぼれば眼まなこ近ちかなり雪の残れる
蓼科の山

遠はろにこの山竝みの裾ひけり光さやけし若
葉青原

山の上の躑躅の原は蒼なり山ほととぎす鳴く
ときにして

谷川の音のきこゆる山のうへに巖を折りて子
らと我が居り

裾野原若葉となりてはるばるし青雲垂りぬそ
の遠きへに

静けさよ雲のうつろふ目の前の山か動くと思
ふばかりに

野の上に雲湧く山の近くして忽ちにして隠る
ひにけり

水の音聞きつつあれば心遠し細谷川のうへに
わが居り

山の上に心^{のび}伸々^{のび}し子ら二人鈴蘭の花を掘りて
遊べる

山にゐることを忘れて花を掘る子ども二人よ
ただ花を掘る

幼子に心はなけれ花掘ると同じところに寄り
て掘りをり

山の上に花掘る子らを見つつをり斯のごとく
に生ひ立ちにけり

ここにして遙けくもあるか夕ぐれてなほ光あ
る遠山の雪

左千夫忌

七月八日第十一回左千夫忌を修す。同年輩者
多く會せず。年ゆき人散ずるの思多し

我さへや遂に來ざらむ年月のいやさかりゆく
奥津城どころ

夏もなか

山下の古井を汲みてそそぎをり萎れむとする
夕顔の根に

一ぼんの夕顔を惜しみ朝な朝な古井の水をわ
がそそぎをり

夏の夜の朝あけごとに伸びてある夕顔の果を
清しむ我は

露に霑るる夕顔の果は青々し長らかにして香
ひさへよし

夕顔は煮て食ぶるにすがすがし口に噛めども
味さへもなし

旱天

遠空にむらだつ雲の待てれども雨ふりがたし
夕焼けにつつ

この山の杉の木の間よ夕焼けの雲のうするる寂
しさを見む

夏七月皇太子殿下富士山に登らせ
給ふ

青雲の八重雲の上にかしこきやわが日の御子
の御馬は向ふ

あり立たす山の頂は見えねども仰ぎてぞ思ふ
青雲がへを

天の原富士の高根の頂に在り立たすらむ皇子
し思ほゆ

ある時

股引もひきを穿はかねば心安まらず田畑あはに馴なれて老い
し父はや

代々木原

夕ごとに遠とほべに見ゆる雲の峰のこのごろ低し
秋づきぬらし

この日ごろ澄みまさりゆく空のはてに雲の峰
低く夕照りにけり

夕ごとに澄みまさりゆく空寂し燕もおほく飛
ばすなりつる

高 原

赤松の林のなかに微塵みじんだに動くものなし日は
透りつつ

夏の夜の更けゆくままに心清すがし肌を脱ぎつつ
書きつぎて居り

偶 作

うらなりの南みな瓜ちやの尻ぞ曲りけるものの終りは
あはれなりけり

關東震災

九月三日信濃を發し五日東京に著
く。六日下町震災中心地を訪ふ

遠近とちの烟こちに空や濁るらし五日を経つたほ燃
ゆるもの

灰原をふみつつ人の群れゆけり生きたるもの
も生けりともなし

かくだにも道べにこやる亡きがらを取りて歎
かむ人の子もなし

日本橋橋下猶屍を收めず

濠川に火はのがれむと思はねどすべなかりけ
むあはれ人々

老母^{おぼは}を車^{くるま}にのせてひく人の生きの力も盡きは
てて見ゆ

大宮の芝生に群れて人臥^これりこの世はいかに
なりはてぬらむ

大君の御濠に下^おりて衣すすぐ己^{おの}が身すらを夢
と思はむ

埃^{ほこり}づく芝生のうへにあはれなり日に照らされ
て人の眠れる

焼け舟に呼べど動かぬ猫の居り呼びつつ過ぐ
る人心あはれ

山の手

月よみののぼるを見れば家むらは焼けのこり
 つつともる灯もなし

高田浪吉隅田川に浸りて纒かに難
 を免る。母と妹三人遂に行方を失ふ

現し世ははかなきものか燃ゆる火の火なかに
 ありて相見けりちふ

火のなかに母と妹を失ひてありけむものかそ
 の火の中に

己れさへ術なきものを火の中に母と妹をおき
 て思ひし

あな悲し火に焼かれたる人の背に薬ぬりつつ
われは思ふも

一ぼんの蠟燭の灯ひに顔よせて語るは寂し生き
のこりつる

十
月

焼け跡に霜ふるころとなりにけり心に沁しみて
澄む空のいろ

焼け跡に霜ふる見れば時は経ぬ夢のごとくも
滅びはてにし

うち竝ぶ假家かりやの屋根の霜とけて滴りおつる光
寂しも

本所被服廠跡に來る。散亂の狀猶
甚し

生きの世のうつし心も我はなし骨さへ土の上
に積まれし

うち日さす都少女の黒髪は隅田川べの土に散
りばふ

ありし日の老弱男女あなあはれ分ちも知らに
なりにけるかな

本所相生警察署長が群衆に向ひて被服廠跡に
遁れよと言ひしは當時にありて已むを得ざる
に出でたるべし。責を感じたる心中推測に堪へず

ひろ場に人を死なせむと思はめや己れを悔い
て命斷ちつる

高田浪吉一家の假小屋成る

きのふ今日假家かりやのうちに住みつきて寂しくあ
らむ亡き人のかす

ただ一つ焼けのこりたるものをもちて佛刻む
と聞くが悲しさ

満洲

十月十九日拂曉京城にて支那官人
二三下車の後は車室中予一人ある
のみ

野の家の屋根の上に干す唐辛子くわんしん紅べに古りて冬に
入るらし

汽車のなかに一人となりて我は居り遠くはろ
 けく枯野^{からの}はあらむ

この國の野のへの土のいろ赤しさむざむとし
 て草がれにけり

行きゆきて寂しきものか國原の土に著くなす
 低き家むら

雨あがる空のいろ寒しわが汽車のあふりの風
 に靡く高梁^{たかき}

鴨綠江に近づく

草枯の岡のうしろに疊まれる天雲低し海にか
 もあらむ

久方の空ひろらなり鴨^{あひ}緑^{なは}の流れのはてに低き
山一つ

一と國の境をこえてなほ遠し雪さへ見えぬい
やはての山に

十月二十日拂曉金州につく。ここは
子規居士從軍の所なり

枯原のをはりの磯に波寄れりここに血を吐き
てつひに止みけむ

旅順二百三高地古戰場に登る

山の上ゆ近きに似たり明らか^に海におち入る
夕日の光

海の日の入りて明るき山の上ここに戦ひて誰
か歸りし

年月はとどまることなしこの山の岩に沁み入
る夕日の光

乃木將軍一子戦死の址

山かげの土の窪みの一とところ涙を垂りて我
は見むとす

白玉山は旅順戦死者納骨堂のある
ところ

この山に櫻を植ゑて年どしに花ひらくとふ聞
くが悲しさ

十月二十二日奉天に著く。途上黒溝
臺戰跡を望む

わが村の貧しき人のはてにける枯野の面おもを思
ひ見るわれは

奉天北陵に詣づ

枯原の夕日の入りに車ひく驢馬の耳長し風に
い向ふ

野の窪の雪解ゆきげの水を踏みわたる驢馬の腹毛は
霑しづれて雫けり

みたまやの青丹あそにがはら瓦かいらにふりおける霜とけがたし
森深くして

二十三日長春に向ふ

寒ざむと夕日あたれり昨夜降りし雪むらぎゆ
る土山ひとつ

たまさかに野のへに立てる冬木ありて空の高
きをやや思はしむ

おのづから西に傾く枯原のただに傾けり日の
入るところ

夕日の入るそきへに雲の疊まれりたどきも知
らに我は向ふも

東ひむがしの月かも早き枯原のはたての雲は夕焼けに
つつ

草枯れの國のはたての空低し褪せつつのこる
夕焼の雲

いや北に來りて寂し楡にんの木の冬木の枝のひろ
がる青空

わが行きもいやはてしなる町寂し露西亞毛布
を購ひにけり

二十六日撫順より再び大連に向ふ。
立山附近日本人の家屋を望みて

草枯の丘のすそべの家いくつ國とほく來て住
みやつきぬる

鞍山なる矢澤氏宅にて

庭つづき枯草原にあたる日の光こほしみ出で
て歩みつ

二十九日大連出帆

あからひく光は満てりわたつみの海をくぼめ
てわが船とほる

わたつみの空わたる日の沈むまで一つの船に
あふこともなし

山さへも見えずなりつる海わたなかに心こほしく
雁の行く見ゆ

わたの原光にさはるものもなし遠くはるけく
雁の過ぎつる

土田耕平飯山に病みて未だ歸らず

人ひとり旅にこやりてかへり來ぬ今年の秋は
心寂しき

遠國に病みてこやれる人のために裕を送るこ
ろとなりにし

北空の山をへだててある人を心に思ひ行くこ
ともなし

飯山の丘はわれ知る北にゆく流れに向ひ一人
かもあらむ

玉きはる命かよわし久びさに今日つきにける
玉章の文字

折折の歌

松原のあひまあひまの芒の穂やうやく著^しるく
見ゆるころかも

うれしくて戯るるらしわが衾にもぐり來れる
子どもにあたまた

初冬

遠嶺には雪こそ見ゆれ澄みに澄む信濃の空は
かぎりなきかな

からまつの落葉はおそし野の空の澄みの深き
を思ふこのごろ

冬空の晴れのつづきに落葉したるから松の枝
 は細く直なり

からまつの落葉たまれる細徑は踏むに柔かく
 ころよきかも

野の道の霜どけしるくなりぬれば踏みつつぞ
 ゆく枯芝の上を

日の暮れの西空明かし粗あらに葉を落したる
 からまつの枝

大正十三年

一
月

冬枯れて久しき庭や石垣の苔をついばみて小
雀らぶの居り

石を踏み苔をついばむこがらめの行ひ疾はやし松
に移りぬ

いくばくもあらぬ松葉を掃きにけり凍りて久
しわが庭の土

みそさざい來しとし見えて影もなし凍りあが
りて久しき庭土

諏訪湖畔

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波
にうつるふ

をりをり

障子あけて昨日の朝も今日の朝も遠くながむ
る春さりにけり

春山に木を樵る子らは思ひなからむ遠く居り
つつ物言ひかはす

古草ふるくさに新草にいぐさ交じり生ふる野にせせらぐ水や隠
るひにけり

山かけに畑を打ちゐる少女子よ日ねもす物を
言ふこともなく

暮
春

松の芽の穂さきの蒼紫に崩えいづる春や老け
にけるらし

よべの雨に小徑こみちの石の現れてすがしくもある
か散る松の花

山の湯

白雲の下りぬ沈める谿あひの向うに寂しかつ
 こうの聲

小泉の山を低みか雲わたる裾野の末に頭かく
 りぬ

前山の風に吹かれて来る雨か櫟若葉に日はあ
 たりつつ

山なだり打ち伏し靡く楮葉の目に痛きまで吹
 く嵐かな

曇りより折りをり雨は落つれどもあやに明る
 し若葉山道

ふる雨に音するばかりこの山の櫟若葉はひら
きけるかも

山うらの一つところより聞えくる筒鳥のこゑ
は呼ばふに似たり

山のべの若葉を浅み三日月の木のまがくり
に光寒けさ

湖
畔

生れいでて命短しみづうみの水にうつるふ螢
の光

ぬば玉の夜の空はれてやや寒し水草の螢とび
ものぼらず

信州田中法善寺

七月しちがつに入りて雪ある遠き山山門外さんもんがいにいで立ち
見れば

門前もんぜんより傾く丘の裾遠し川をめぐらして音の
聞えぬ

山内さんないの松のあひだに月照れり涼しさ過ぐる夜
はくだちつつ

ある時

諍あらしひを我に止めよといふ人あり自らおのづかにして至
る時あらむ

燕嶽の上

高山たかやまのつが榎つがの木立は皆低し肩に觸りつつ麻蘿まがせさがれり

山の上のつが榎つがの木き肌はだは粗あら々あらし眼まなこにしみて明けそめにけり

高山たかやまの木こがくりにして鳴くうそ鶯うその聲の短きを心寂しむ

山のうへの岩にむら簇がりてさく花の紫深し露寒みかも

よべひと一夜よ雲ありけらし山のうへのお花畑は露しとどなり

天^あ降^りりたる娘^こらと思^もはねど雲の上のお花畑に
あやに遊べり

現^{うつそみ}身の人にしあれば天なるやお花畑を踏みて
惜しむも

わが齡^{よはひ}やうやく老^ふけぬ妻子らとお花畑にまた
遊ばざらむ

雲の海沈^{しづ}もりて遠き山浮べり殆^{ほとほ}とにして思ひ
至らむ

山にゐるわれの心は幽かなり笹の葉の露に咽^{のみ}
喉^どをうるほす

中房温泉

高山の谷あひ深くいづる湯に静もりてをりあ
はれ妻子ら

太虚集終

○ 卷末記

大正九年後半から大正十三年前半まで大凡四个年の制作から四百八十一首を選んで本集を編んだ。削り去つたものもあり、保存してゐた歌稿を新に修訂して加へたものもある。順序は大體制作の順序に従つてゐるが、同じ事柄でも割合に早く出来たものと、ずつと後までかゝつて爲上げたものと同居するやうな所もあり、長くかゝつて出来たものを、事柄の順序によつて前の方に列べたといふやうな所もある。例へば大正九年「長崎」のうち、初めの部分はその當時発表したものであるが、後の部分は

下書きだけ出来てゐて最近漸く爲上げたのである。斯ういふことは、小生の作歌に可なりある現象であつて致し方がないやうである。經驗の直後に歌があるべきだといふ人々もあるが、小生には必しもそれが出来ない。作歌心理がそれらの人々と違ふやうである。

數は平均月十首に當つてゐる。これも小生の現在では精一ばいのやうである。これ以上作れといふことになれば、頭が稀薄になりさうである。數の多からざるは、小生の素質から出てゐるのであつて、これも致し方ないのである。

○

この集の前に『氷魚』を出した。『氷魚』の末年は、雜司ヶ谷・關口町と移り歩いた家族生活を解いて、妻子を國へ歸へした頃であつて、諦めに似た心が、底の方に潜んでゐたやうである。アララギ發行所を麴町に移し、そこから代々木山谷に移して、土田耕平・藤澤古實二君と同居し、小生は信濃と東京を毎月往復して二君から巨細の爲事に當つて貰ひ、後に高田浪吉君と同居して、今年更に麴町の舊發行所に戻つて來た。この四年の間に、土田は病んで信濃に移り、藤澤は世田ヶ谷の野砲兵隊に入營し、高田は震災のために母と妹三人とを失つた。轉變の世相は數年にして同居者三人の境遇を變らせてゐる。

私としては、この四年の間は、信濃山中にゐる家族が打ち揃つて健康で

あり、平和な生活をつづけることが出来た。これは小生として、今までに珍らしいほどのことである。大正十年夏には二子を伴れて木曾御嶽に登り、昨年初夏は妻と二子とを伴れて巖温泉に淹まり、芽ぶきのおそい山上の原に杜鵑郭公の聲を聞きながら鈴蘭の花を掘つて遊んだ。今年の夏は妻と三子とを伴れて燕嶽に登った。親子揃つて高山に登るといふことは一生のうちに、さう多くないであらう。これは家族健康の賜物であると忝く思つてゐる。燕嶽へ登つた子どもの中には、小生の末子もある。それが一萬尺近い高山へ登るやうになつたのを見ると、親の責任も追々果たすに近づいてゐる心地がする。さういふ家族生活の中にも私や妻の心を悩ますほどの問題は時々起つて來るのであつて、これはど

うせ一生は修業と思つてゐるより爲方がないのである。年々日々起つて來る事件は、繰返すに似て、それが皆新しい。小生も新しい経験を可なり多く嘗めて來て、間近く五十歳に踏み入らうとしてゐる。それから後は長いのか短いのか見當がつかない。

大正九年には、齋藤茂吉君の宿を訪うて長崎に行き、子どもの時から夢物語のやうに聞いてゐた古い港を見ることが出来た。唐寺からでらや丸山や出島跡や天主教村を渡邊庫輔君から案内して頂いて古く懐しい匂ひの猶残る心地がした。それから齋藤君夫婦と土橋康通氏と共に温泉うんせんだけ岳山上の温泉にも行つた。その頃齋藤君は病氣が猶快復してゐなかつた。翌年十一月獨逸留學の途に上る時も、矢張り本當の健康者とは言へなかつ

たのである。そんな體で洋行して大丈夫かと小生が言つた時、齋藤君は「何所にゐても病む時は病む。行くと決まつた所へは行く方がいく」と答へた。そんな決心で齋藤君は今年で四年がけあちらの土を踏んでゐるのである。

長崎から歸つた年の秋は、石原純氏に隨つて陸前の金華山へ行き、時化のために二日間島に滞在して、歸りには夜半風浪のために船の進行が止まるほどの痛い目に遭つたこともあつた。あの時波に濡れながら船上に跪まつてゐた石原氏の姿が非常に度ましく小生の頭にのこつてゐる。

大正九年の初めには平福百穂畫伯が大學病院で盲腸炎の切開をして、危き命を取りとめ、翌年の秋更らに鼻腔の切開をして、これも可なり心が

かりの経過を通つた。腸手術の魔酔から醒めて、初めて手を動かした時書いて示したのは一首の歌であつた。鼻腔手術後の出血が止まらなかつた時、畫伯は眞正の意味で絶對の安靜を一週間續けられた。小生が出血の止まらないのを見て、靜かに寢てゐる外はないと言つた時、畫伯は「これ以上の靜肅は出來ない」と紙に書いて小生に示した。

この年の一月には山本信一君が亡くなつてゐる。山本君の晩年は悲痛であつて書きしるすに忍びない。百穂畫伯の情誼は九泉の下に忘れないであらう。死歿數日前に出來た一聯の歌は同君の終りを美しく哀しくしてゐる。それを小生は忘れ得ない。

大正十一年晩秋には、古い萬葉集の本を筆寫するために、京都黒谷瑞泉

院に淹まり、それから中村憲吉君に伴れられて、大和の萬葉集古蹟の一部を巡り歩いた。永く憧憬してゐた明日香の里の宿屋に友と枕を並べてやゝ硬い蒲團を引被ぶつて寝た晩の心持は如何にも落ち著いた懐しさであつた。友は東京を去つてから、暫く備後峡谷の故郷に暮し、それから大阪へ出て忙しい新聞編輯に携つてゐるうち、もう三人の子供の親になつた。東京で共に雑誌を編輯してゐたこの友の學生時代を想へば、お互に身の上が變つてゐるのである。それが折りよく(折りよくと言つても、中村君が二日の休暇を新聞社から取つてくれたのである)古い萬葉の國に泊り合ふことが出来たのである。この友は、いつも逢へば夜更けまで小生を寝かさなぬ癖をもつてゐる。それもその夜に應はしい心地がした。

9

大正十二年九月一日の關東震災は、今更ら絮説しようと思はない。自然の偉力と云うても、あくなれば暴力である。暴力であつても、それが自然の不可抗力である以上何うすることも出来ないのである。自然に對する人間の力のどん底を、あの震災でまざ／＼目の前に見せつけられた心地がし、小生等のもつ人生觀も、あくいふ現象に對して、新に根底から揺り醒まされる心地がする。幸にしてアララギ同人悉く難中に命を全うしたのは眞に天の祐けである。只、高田君の家族に痛ましい運命が及んだのは却す／＼残念の至りである。岡麓氏・竹尾忠吉君・廣野三郎君・築地藤子君等その他多數アララギ會員が住宅を焼かれ、岡氏の如きは、大家族を擁して今猶安住の所を得られぬ狀である。竹尾君は先年若き妻を失

ひ二人の遺子を抱いて途方にくれてゐる時、更に火災に遭つたのである。小生は震災後一个月を隔て、旅順二百三高地の頂上に立つた時、つくづく思つたのである。數万の人類がかうべを並べて斃れたもの、東に被服廠跡あり、西に二百三高地あり。昨日その東を踏んで、今日西の地に立つは堪ふべからざる感慨である。二百三高地では夕日の渤海に入り果つるまで山の上に佇立した。

滿洲は小生の生れて初めて踏んだ土地である。大連以北に山と海とあるが、概ね荒寥たる曠野であり、特に奉天から長春に至る間は、一望涯なき平蕪である。小生は大連より滿洲行の汽車中で十三夜の月を眺め、長春に入る汽車では西に夕燒の空が美しく残つてゐる時、東に十五日の月

の皎々と地平に上るを見た。滿洲では南滿洲鐵道會社や池内赤太郎君をはじめ湯本勇之助・秦美穂・石原善吉・羽室長靖・武田尊市・江口とり・田淵(舊)姓市花・照子・清島貢・矢澤邦彦・小島三郎諸君や其他多數の諸君の厚意を蒙つて旅情の寂寥を慰め得た。

四年間に小生の周圍に起つたやゝ著るしい事がらを書き記るせば、この他にも猶際限がない。「水魚」の後を嗣いだ本集の歌に若し多少の推移があるとするれば、以上の如き身邊周圍の事情や事件が、小生の心に浸潤したり、小生を撫育したり、刺戟したりした結果である。左様な事柄の一端を書き記るすことは、本集を編するに因縁淺からぬ心地がするものである。

初め齋藤茂吉君病後の身を以つて獨逸留學の途に上り、小生等同輩に歌の少なかつたころは、衷心甚だ寂寥の感があつた。この間にあつて平福百穂畫伯が畫筆多忙の時間を割いて殆ど毎月歌を示して下さつたこと、どの位小生の刺戟になつたか知れない。岡麓氏中村憲吉氏も時々歌を示して下さり、アララギの後任者が非常の決心を以て今日まで精進の一途をたどつてゐることは、これ亦少からぬ刺戟を小生に與へてゐる。

最近、岡中村土屋平福四氏打揃つて歌を發表し、中村氏に『しがらみ』の快著があり、土屋氏亦新にその歌集を公にしようとし、齋藤氏亦來春早々歸朝

しようとしてゐる。小生の歩みに力を得ること多大の感がある。只久しく小生と同行した石原純・古泉千桎兩氏及び釋迦空氏が今年に至つて小生等と手を分つに至つたことは回すべからざる遺憾事である。道は各自にある。分るべき時に分れるのは致し方がない。各の道を尊敬するところが大切である。小生は殊に三氏に因縁が深い。今後と雖も深い注意を三氏の道から放たないつもりである。凡そ、以上の如きことを猶卷末に附記するのは、小生の歌は、アララギ同人から感化を受け、刺戟を受くることの多いのが實際であるからである。自分の歌は自分の道から生れたものであるが、それが何人の影響をも蒙らずして獨自に拓き得たものと思つてはゐない。殊に、歌として直接影響を蒙つた諸氏に對して感

謝の心を表するのである。

○

本集の装幀は例により平福百穂畫伯を煩した。特に十月に入つて、帝國美術院展覽會出品畫審査の忙務中を煩はしたと恐縮に堪へぬ。表紙の雲と山、見返しの落葉、何れも會心の作を得て感謝の至りである。古今書院主人は印刷に製版製本に完美を盡すと言つて奔走して下さつてゐる。これ亦感謝に堪へぬ。小生はこの筆を擱いて、今夜信濃の家に歸るつもりである。信濃はもう紅葉の盛りで、高山には雪が降つてゐるであらう。

大正十三年十月十五日

麴町下六番町アラギ發行所にて鳥木赤彦記す

大正十三年十一月五日印刷
大正十三年十一月八日發行

大虛集奧附

定價貳圓貳拾錢

著者 久保田俊彦

發行者 橋本福松
東京市外西大久保四五九

印刷者 神谷岩次郎
東京市日本橋區兜町二

版權
所有



發行所 古今書院

東京市外西大久保四五九
振替東京三五三四〇番

東京印刷株式會社印行

大島製本

アララギ叢書目次

| | | | |
|-----|----------------|-------|-----------------|
| 第一編 | 島木赤彦 中村憲吉合著 | 馬鈴薯の花 | 東陽堂發行 定價四角 |
| 第二編 | 齋藤茂吉著 | 赤光 | 東陽堂發行 定價四角 |
| 第三編 | 古泉千樞著 | 屋上の土 | 未刊 |
| 第四編 | 島木赤彦著 | 切火 | 品切 |
| 第五編 | 齋藤茂吉著 | 短歌私鈔 | 品切 |
| 第五編 | 齋藤茂吉著 | 續短歌私鈔 | 品切 |
| 第六編 | 中村憲吉著 | 林泉集 | 春陽堂發行 定價四角 |
| 第七編 | 齋藤茂吉著 | 童馬漫語 | 春陽堂發行 定價四角五分 |
| 第八編 | 島木赤彦著 | 氷魚 | 春陽堂發行 定價四角五分 |
| 第九編 | 長塚節著 | 長塚節歌集 | 春陽堂發行 定價四角七分 |

| | | | |
|------|--------------|--------|------------------|
| 第十編 | 齋藤茂吉著 | あらたま | 春陽堂發行 定價四角 |
| 第十一編 | 伊藤左千夫著 | 左千夫全集 | 春陽堂發行 定價四角五分 |
| 第十二編 | 松倉米吉著 | 松倉米吉歌集 | 古今書院發行 定價四角五分 |
| 第十三編 | 土田耕平著 | 青杉 | 古今書院發行 定價四角 |
| 第十四編 | 石原純著 | 靨日 | アルス發行 定價四角 |
| 第十五編 | 中村憲吉著 | しがらみ | 岩波書店發行 定價四角 |
| 第十六編 | 島木赤彦著 | 歌道小見 | 岩波書店發行 定價四角五分 |
| 第十七編 | アララギ 發行所編 | 灰燼集 | 古今書院發行 定價四角 |
| 第十八編 | 島木赤彦著 | 太虚集 | 古今書院發行 定價四角 |
| 第十九編 | 以下續刊 | | |

